

LET'S MAKE A DIFFERENCE ONE MEAL AT A TIME!

FEED WITH 

## フィード ウィズ ハート

### 世界最長のロックダウン

フィリピンのマニラ首都圏と周辺の州では、2020年3月以来世界最長のロックダウンと言われる状況が続いています。4段階ある行動制限のうちでも最も厳しい段階とその下を行ったり来たりしている状況で、午後8時から午前4時までの外出制限、子どもと高齢者の外出禁止、飲食店の無条件閉店などにより多くの人が困り果てています。

フィリピン政府もこれまで1兆円近い食料や現金の支給策を打ち出しているのですが、多くの人々はそれが届いていないと言っています。貧困世帯の数も増え、コロナ前の2倍以上にあたる420万世帯が今日の食べ物にも困る状態になっているという調査もあって、多くの人々が毎日を生き延びるだけで精いっぱいという状態が続いています。

### PROJECT TEAM



Agatha Michel-Gabarron



Carmel Corpis

FEED WITH   
making a difference one meal at a time

### アガサのバヤニハン

そんな中、街のあちこちで支援が始まっています。フィリピンには昔から、困ったときには互いに助け合うバヤニハンという伝統があるのですが、それが色々なところで始まっており、NHK国際放送の報道では500か所以上の場所で支援活動が確認されているとのこと。

フィード・ウィズ・ハート（FWH）も、そのバヤニハンの実践としてアガサ・ガトボントン氏が友人と始めた支援活動です。アガサ氏は、草の根援助運動スタッフにゲイの愛称でなじみが深く、NGOスタディツアーなどいわゆるオルタナティブツアーを扱う旅行会社を運営してきました。そのネットワークを生かして、数十回におよぶフィリピンスタディツアーの現地手配と案内はすべてゲイがやってくれましたし、現地調査での要人との会合や関連NGOとの連絡まで手配してくれました。草の根援助運動スタッフには公私共に付き合いの深い人です。

### フィード・ウィズ・ハート

FWHの始まりは今年の2月、バレンタインデーでした。旅行会社の仕事がなくなり自らも苦境ではあるのですが、さらに苦しい人を放っておけないと、ゲイは二人の友人と共に100人分の食事を用意して、ケソン市タンダンソラのクリアット村で配りました。最初はだれも来ないのではと思ったそうですが、予想以上に多くの人が訪れて、用意した食事はすぐになくなったとのこと。

しかし、今日は助かったけれど明日はどうしよう、と言っている人々の声を聴いて、2回目からは方針を変更、食事ではなく家族で数日食べられる食材を配ることに決めました。3月13日の配布には、約200人分の食料品を用意して、カワヤン市の女性組織の手を借りて配りました。



2021年2月ケソン市タンダンソラのクリアット村

# 草の根援助運動から 100万円の支援



## 寄付者が増えた

自分たちのお金で始めたプロジェクトでしたが、寄付や手伝いを申し出る人が増えてきました。それを受けて配布を拡大、4月の3回目は、パシグ市アーコンバトでの食料配布に加えて、カオオカン市の乗り合いバス（ジブニー）ドライバーに配りました。厳しい外出制限のおかげで人々が外に出なくなり、自営業者であるジブニードライバーは仕事なくなって道端で物乞いする姿が報道されていたからです。このときは約230人に配りました。

5月はフィリピン大学ディリマン校のキャンパス内に住んでいる、ワライの人たちのコミュニティを対象に280人分を配りました。ワライというのは、これも草の根援助運動のかかわりの深いサマル島出身の人たちで、独特のワライ語を話すのですが、首都圏ではしばしば差別されるため、集まってコミュニティを形成して住んでいます。

広いキャンパスを持つ国立フィリピン大学はそうした人たちの格好の住処で、日本では考えられないことですが、キャンパス内にいくつかのスラムができています。ワライのコミュニティもその一つで、もともと苦しい生活がさらに追い込まれて、日々必死の思いで生きている人たちです。

6月には父の日に、主に輸送の仕事に携わっている人たち300人に食料を配りました。同じように7月、8月にも食料配布を続けています。



2021年5月フィリピン大学キャンパス内で

## 草の根援助運動

持続可能な支援を目指してきた草の根援助運動ですが、今までもかかわりの深い地域では災害緊急支援を行ってきました。今回のコロナ禍も災害としか言いようがないため、フィリピンで苦しんでいる人々への支援を決定し、Feed with Heartに100万円の支援を行いました。FWHではこれを受けて、より計画的に必要な人々を探し出し、効率的に配布する体制を整えているところです。

日本でも緊急事態宣言が各地に出されている2021年8月現在、マニラ首都圏でもまた最高レベルのロックダウンに入っています。食料配布もままならない状況ですが、FWHは人々のための支援を続けており、草の根援助運動もできる限りのことを行うことにしています。（小野 行雄）



2021年6月父の日に食料を配る

# GAD

## Gender and Development 2020年度 フィリピンにおけるジェンダー と開発 (GAD) プロジェクト



ダルヨンのヘルスワーカー

photo1



メンバーが栽培する植物

photo2



野菜の臨時マーケット

photo3



台風被災地への物資支援

photo4

GADプロジェクトは、草の根援助運動のフィリピン現地パートナーNGOである「PRRM」とさらにそのパートナーである全国女性組織「ダルヨン」によって2014年以来運営されているプロジェクトである。プロジェクトの対象12州の内8州で優先展開し、それぞれの事業を軌道に乗せて事業の安定化と拡大を進めているが、2020年度は多くの災害とコロナの影響で本来の活動は一時ストップし、従来と異なるアプローチを余儀なくされた。

2020年は、相次ぐ災害（注1）で、全国女性組織「ダルヨン」本来の活動であるGADプロジェクトを一旦棚上げし、行政の優先施策である災害からの復興に注力することとなった。目標として「復興の推進と緊急事態下における女性の意思決定力向上」に基づき活動した。ダルヨンのほとんどのメンバーは村のヘルスワーカーの立場でもあり、また、リーダーの何人かは、村の緊急対策チームのメンバーでもある。今回かれらは、コロナ対策の役割を担った。 - photo1 -

ダルヨンのリーダーはじめメンバーは、まず自分たちの命を守る活動をした。野菜の販売、物々交換、植え付けをするとともに、村の中に臨時のマーケットを設けた。 - photo2 photo3 -

また、12月18～21日には、地方女性連合の全国組織と協力して、2つの大きな台風の被災地に対し、ダルヨンから10万ペソ（約23万円）を拠出し、南カマリネスの10の組織、北カマリネスの50人のメンバー、マリンデュケの7つの村に援助を行った。 - photo 4 -

### 草の根援助運動としての評価

相次ぐ災害の影響で、ダルヨンのリーダーたちはかなり苦労しているが、今まで培ってきた自立するための自主的な活動の成果が出てきているようである。また、ダルヨンが自治体に働きかけて住民に対する行政の支援を実現させている点は素晴らしいことである。

一堂に会しての会議やコミュニケーションができない中、携帯端末を利用してSNS等により、学びや情報共有することに積極的に取り組んでいる。ただし、これらオンラインの設備が十分ではないことや、利用するスキルの向上はこれからさらに対応が必要な点である。（錦織 幹雄）

（注1）2020年1月にはタール火山が噴火、1月末の新型コロナはやがてパンデミックとなり、3月にはルソン島からロックダウンが始まった。5月に台風1号の被害が発生し、10月から12月にかけて大型台風に見舞われた。さらに2019年9月に発生した豚コレラは2020年6月時点でまだ続いていた。

\*GADプロジェクトは、長年にわたり、山形退職女性教職員会の会の支援を受けています。